

不確実性下の農工分業体制：領主の存在理由

関根 順一

1. 本稿の課題

領主は一定の領域を支配し、その土地に生活する農民の剰余生産物の少なくとも一部を取得する。では直接的生産過程に関与しない領主が、農民の剰余生産物を取得できるのはなぜだろうか。このような理論的色彩の強い問題でも問題解決の第1歩は個別具体的な歴史事実に触れることである。われわれはこれまで、領主と農民の経済行動に関してできるだけ広範な知識を得る目的で、中世ヨーロッパ、植民地期から農地改革実施までのラテンアメリカ、分離独立以前のインド、この3つの地域の経済史研究から多くを学んできた。その結果、時間的空間的に遠く隔てられているにもかかわらず、3つの地域には、生産技術の特徴や主要な経済主体の経済的機能に関して際だった類似性が見られることがわかった。この類似性は、3つの地域の基本的経済構造が同一のものであることを示唆する。さらに、3つの地域の政治的文化的背景が明らかに異なることに注意すれば、このような基本的経済構造の一致は、それが政治的文化的環境から独立に成立しうることを示し、基本的経済構造自体に関する研究に展望を開くものである¹⁾。

近代以前のヨーロッパ、ラテンアメリカ、インドの3つの地域に共通な基本的経済構造を領主制と呼ぶ²⁾。領主制下の生産技術の第1の特徴は社会全体における労働生産性の低さである。労働生産性が低いとき、自然から財を

直接獲得する広い意味の農業生産は、獲得された財をさらに加工する工業生産に優先する。社会全体の生産に占める農業の比重は極めて高い。工業生産は、加工食品・衣類・住居を生み出し、農耕に利用される農具や輸送手段・生産設備を提供する。一部の工業製品は、長時間にわたる労働技能への習熟を経て作られる。このような工業製品の製造は、要求される労働技能が特に手の熟練に集約されるために手工業生産と呼ばれる。農業と並んで手工業が、本稿が対象としている3つの地域の社会的生産を支えている。

一部の工業生産が熟練を要するとき、人口は、高度な技能を身につけた少数の手工業者と、農業生産および熟練を要しない工業生産に従事する多数の農民に分れる。簡単な農具を用い、家畜の労役に依存する粗放的な経営であるにもかかわらず、農民は多種多様な農産物といくらかの工業製品を生産することができたから、農民経営の自給自足性は農産物を中心に相当高かった。しかし、農民は、熟練労働によって作られる一部の工業製品を自給することはできなかった。一方、手工業者は、工業生産の傍ら、しばしば農耕にも携わったが、自ら収穫する農作物だけでは生計が立たなかった。このとき、両者が、各々不足する財を手に入れようとすれば、互いの生産物を交換するほかない。農民は、農産物の余剰分を手工業者に提供し、自分自身では生産することのできない工業製品を手に入れる。一方、手工業者は、自らが製作した工業製品と引き換えに不足がちな食糧と工業原料を得る。こうして、農工間の分業体制は、必然的に農産物と工業製品の交換を伴う。

これまでの事例研究は、領主がこの農産物と工業製品の交換に何らかの形で介入していることを明らかにした³⁾。財の交換は、それぞれの財の生産者さえその場に居合わせれば成立可能であるように思われる。ところが、実際の農工分業体制では、生産の当事者ではない領主が農産物と工業製品の交換に介入する。別の言い方をすれば、実際には、農工分業体制下での生産物の交換は農民と手工業者の間の直接交換にはならない。それはなぜだろうか。

農民は主として農業生産の担い手として、手工業者は工業生産の担い手として、農工分業体制が存続する上で不可欠な役割を負い、その役割ゆえに農工分業体制の中で確かな存在理由を持つ。領主もまた、農民と手工業者の間の交換過程に介入する以上は、この体制の中で一定の役割を演じているにち

がない。本稿の課題は農工分業体制における領主の機能を明確にすることである。いうまでもなく、そのことは領主の存在理由を示すことにほかならない。

2. 農業生産の不確実性

財の加工が主として手の熟練に依存しているという生産技術の特徴は、手工業者に熟練労働の遂行という独自の役割を与え、彼らを農民から区別した。同様に、農工分業体制を支える生産技術の別な特質が領主にも独自の機能を付与しているとは考えられないだろうか。

簡単な農具と役畜の動力に頼る粗放的な農法は、決して豊かな実りを恒常的に保証するものではなかった。農民1人の収穫量は平均して、彼自身が生活していくのに最低限必要な食物消費量を上回っていたが、収穫量の変動は激しく、年によってはこの必要量さえ確保できず、食糧不足が頻発した。このように、農工分業体制下の農業生産の注目すべき特徴は、労働生産性の低さとともに農産物の年収穫量の分散が大きいことである。食糧不足や飢饉の頻発は農業生産のこの特徴の最も端的な表現である。

粗放的な農業生産は自然条件への依存が著しく、人々は、天候不順など自然条件の変化に対してその影響を緩和する十分な手段を持たなかった。それゆえ、飢餓の第1要因は明らかに農耕技術の未成熟にある。とはいえ、飢餓の要因はそれだけではない。たとえ局地的に農業生産が落ち込んでも輸送手段が十分に発達していれば、近隣地域からの食糧の買い付けによって飢餓を未然に防ぐこともできただろう。ところが、前近代社会では、穀物をはじめ重量の割に安価な財の輸送は、大型の船舶の航行が可能な沿岸部や大河の流域に限られ、そこから離れた内陸部では近隣地域間でも食糧輸送が難しく、人々はしばしば局地的な飢餓に苦しめられた。大量輸送手段の発達が遅れていることも飢餓を引き起こす原因の1つだった。結局、前近代社会では、人々は自然災害に備える十分な手段を持たなかったために頻繁に飢餓に襲われたが、農業生産における労働生産性が低い状況では、大量の労働力を農業生産から引き上げて飢餓の発生に備える余裕はなかった。その意味で、頻発

する飢餓もまた社会全体における労働生産性の低さの1つの表現であるといえる。

3. 農産物と工業製品の直接交換

すでに述べたように、農工分業体制下では、農民と手工業者の間で農産物と工業製品の交換が不可避である。もし、この交換において農民と手工業者が自由に振る舞ったとしても、すなわち各々が制約なしに自己利益を追求したとしても双方がそれぞれの生産活動の続行に必要な財を得ることができれば、農工分業体制は農民と手工業者だけで存続可能であり、新たに第3の経済主体を必要としないだろう。だが、この見通しは正しいものだろうか。果たして、農工分業体制はその維持のために、農業生産と工業生産の担い手以外の第三者を必要としないのだろうか⁴⁾。

まず、農工分業体制の存続条件を明確にしよう。人間は生命維持のため一定量以上の食糧を必要とし、どのような経済体制も十分な食糧を確保することなしには存続できない。前近代社会では食糧は主として農耕と牧畜を通じて獲得される。農民は、熟練を要さない工業労働を別にすれば、労働時間のすべてを農業生産に費やす一方、手工業者は、工業製品の製作に加えて、農耕にも従事する。農工分業体制存続の第1条件は、こうして農民と手工業者によって収穫され、毎年供給可能な農作物の総計が、社会の全構成員の生命維持に最低限必要な年間食糧消費量を上回ることである。われわれはすでに手工業者が生活に必要な食糧を完全には自給できないと仮定していたから、社会の存続を前提する限り、手工業者は食糧供給を農民に依存しなければならない。

農工分業体制下、工業製品は衣食住に利用されるだけでなく、農業生産にも投入される。農業生産が続けられるためには、少なくともその過程で消耗した農具類が補充されなければならない。したがって、農工分業体制存続の第2条件は、農業生産の過程で消耗した農具類を農民経営が遅滞なく補填できることである。もちろん、そのためには、必要な工業製品が手工業者の手で前もって用意されていることが前提である。

前近代社会では各年の農産物収穫量の分散が大きく、農業生産はたびたび凶作に襲われた。凶作は、農民にとっても、また農民から食糧供給を受ける手工業者にとっても深刻な食糧不足をもたらし、凶作の年には、もはや農工分業体制存続の第1条件は満たされなかった。

食糧の備蓄が技術的に可能であれば、不作の年でも農工分業体制が存続する可能性は大きく広がる。というのは、豊作時に十分な食糧を備蓄することができれば、凶作時にその備蓄分を放出し、食糧不足を軽減することができるからである。いま、単純化のために、各人が常に生存水準に等しい消費生活に甘んじ⁵⁾、かつ、食糧はいつまでも必要な期間備蓄可能であると仮定しよう。このとき社会全体における農産物の年平均収穫量が社会の全構成員の年間最低必要消費量の総計に等しければ、農工分業体制存続の可能性は飛躍的に高まる。以下、われわれはこの仮定を受け入れる。すなわち、農作物の平均収穫量は社会全体の最低必要消費量に等しい。もっとも、たとえこの仮定が成立しても、豊年時の食糧備蓄が不十分であれば、凶作時の食糧不足はやはり回避できない。この節の課題は、農工分業体制の存続が生産の当事者である農民と手工業者だけで可能であるかどうかを検討することであった。そこでわれわれは、農工分業体制の存続に関わる多くの諸条件のうち、生産の当事者の行動と直接結びつかないものについては、現実妥当性のいかにかわらず、その成立を仮定する。

では、このような想定の下、生産の当事者の自由な行動はどのような事態を引き起こすだろうか。

農産物の年収穫量が食糧の年間最低必要消費量を超えたときはじめて、農民には、収穫された農産物のうちどれだけを手元に残し、どれだけを手工業者に提供するかという選択の余地が生じる。農民は、農産物と交換に手工業者から工業製品を手に入れることになるから、この選択は結局、農民にとって農産物と工業製品間の消費選択を意味する⁶⁾。このとき、もし何の制約もなければ、農民はできるだけ多くの農作物と工業製品を欲するだろう。より豊かな消費生活を送りたいと願うことは手工業者も同様である。最低必要消費量に加えて、自己保有地での農耕に必要な農具類さえ確保できれば手工業者もより豊かな生活を求めて農作物と手工業製品間の消費選択を行う。こ

ここで農民と手工業者の間で自由な財の交換が始まれば、交渉の結果、社会全体の最低必要消費量を超える農産物の余剰分と農業生産の補填需要を上回る工業製品の余剰分は何らかの割合で農民と手工業者の間に配分される。その配分の割合は両者の需給関係いかんで異なるにせよ、少なくとも農民と手工業者のいずれか一方が生存水準を超える消費生活を享受することはまちがいない。

さて、凶作時の食糧不足に備えるためには平時からの食糧備蓄が不可欠であった。いま農産物の年平均収穫量が社会全体の最低必要消費量に等しいとすれば、豊作の年でも人々の消費生活を生存水準にとどめ、食糧の余剰分すべてを備蓄しなければ、凶作時の食糧危機に備えることはできない。ところが、社会全体の食糧配分が生産の当事者の自由な取引に委ねられる限り、豊作時、農民と手工業者の少なくとも一方は生存水準を超える消費生活によって備蓄すべき食糧を食いつぶし、凶作時、食糧不足を招くことになる。

十分な食糧備蓄がなされないのは、単に農民が将来の食糧不足に鈍感であるからではない。たいていの場合、凶作に備えて備蓄されることになるのは事実上、農民が収穫した農作物である。だから、農民が将来自分自身にふりかかる食糧危機の危険性を見通す力を持てば、たとえ自由な取引の下でさえ社会的な見地から十分な食糧備蓄が可能であるように思われるかもしれないが、それは正しくない。というのは、農工分業体制の維持という観点からは単に農民のためだけではなく手工業者のためにも食糧は備蓄されなければならないからである。備蓄された食糧は危急の際、農民にも手工業者にも支給される。しかしながら、農民は、たとえ自分自身の将来を案じて食糧備蓄に励むことはあっても、手工業者の将来の窮状をも考慮する社会的立場に立つことはない。

食糧危機に加えて、凶作の年、農民が直面するもう1つの困難は工業製品の不足である。熟練を要する工業製品を自ら製作できない農民は、余剰農産物と引き換えに手工業者から工業製品を受け取る。ところが、農業生産が振るわなければ、農民は手工業者に提供すべき対価を失う。そうなれば、農民から対価を得る見込みがなくなった手工業者は、自ら進んで工業製品を農民に差し出そうとするだろうか。手工業者が自己利益を自由に追求している

限り、望ましい報酬を得ることなしに自分の所有物を他人に提供することは決してありえない。農民は工業製品を手に入れることができず、特に、消耗した農具類の補填を進めることはできない⁷⁾。したがって、凶作の年には農工分業体制存続の第1条件の成立のみならず、第2条件の成立までも危うくなる⁸⁾。

農工分業体制下では農業生産の不振により次の2つの事態が引き起こされる。第1に、手工業者も農民も生活に必要な食糧を確保できないこと、第2に、農民に対する工業製品の供給が停止することである。この2つの事態の発生はどちらも農民と手工業者の消費生活と生産活動を脅かし、農工分業体制の存続を危うくする。ところが、農民と手工業者が、それぞれの自由意志に基づいて行動する限り、この2つの事態には対処できない。すなわち、農民と手工業者の間の自由な交換は農工分業体制の存続を保証しない。当事者の自由意志に基づく交換は市場取引と同義である⁹⁾から、この主張は、当事者間の市場取引に委ねていたのでは農工分業体制は維持できないと言明することと同じである。

4. 交換の媒介者

農業生産の不確実性によって引き起こされる危機を回避し、粗放的な農業と手工業に基づく生産活動を維持しようとするれば、農工分業体制はさらにどのような社会的機構を備えるべきだろうか。

不作時に農工分業体制が陥る困難は、第1に食糧危機、第2に工業製品の供給停止であった。

不作時の食糧不足に対処しようとするれば、平年時から十分な食糧を用意しておく必要がある。農産物の年平均収穫量が食糧の年間最低必要消費量に等しい状況では、最低必要量を超えるすべての食糧を常に備蓄することのみが飢餓に対する十分な備えとなる。ところが、平均以上の収穫があった年でも生存水準に等しい消費生活に甘んじることは、すでに見たように、明らかに農民と手工業者の消費欲求に反することである。また、自己利益に忠実である限り、手工業者は、凶作の年、農民に工業製品を提供するのを拒むだろう。

それゆえ、凶作時にも農耕の継続に必要な工業製品を農民に提供しようとするれば、彼らの自由意志に反して、手工業者から必要な工業製品を徴収しなければならない。

このように、予想される2つの危機的な事態に臨んで農工分業体制を維持しようとするれば、その構成員である農民と手工業者の自由意志の抑制が不可避である。農民と手工業者の自由意志は、農工分業体制の維持と矛盾しないよう一定の制約を受ける。では、農民と手工業者の自由意志に制約を加えるのは誰なのか。それは、明らかに農民とも手工業者とも利害が一致しない第3の経済主体である。この第3の経済主体を領主と呼ぼう。

豊作の年、領主は農産物と工業製品の自由な交換に介入し、最低必要消費量を超えるすべての農産物を農民から徴収し、手工業者と領主自身の最低必要消費量を控除した上で残りを備蓄する。農業生産の落ち込みが激しい年には、領主は、平年時から備蓄していた農産物を困窮する農民と手工業者に支給する。同時に、手工業者からは、農業生産の継続に必要な工業製品を徴収し農民に分配する。どちらの場合も、領主は農民と手工業者の自由意志に反して農産物と工業製品の交換過程に介入しており、領主の介入は必然的に両者に対する強制力を伴う。もっとも、領主の強制力が常に武力の行使という露骨な形態をとるとは限らない。非常に多くの場合、領主の強制力は宗教的権威や伝統や慣習の陰に隠れている。

領主の介入によって、農産物と工業製品の交換は交換の当事者の自由意志に基づく直接交換、市場取引から、領主によって媒介された交換に性格を変える¹⁰⁾。

5. 仮説の検証方法

不確実性下の農工分業体制において、領主は、飢餓に備えての農産物の備蓄および工業製品の供給維持という2つの機能を果たす。われわれはこの領主の機能を、農工分業体制の存続を前提に理論的に導いた。当然のことながら、われわれの理論仮説は、歴史的事実に照らして検証されなければならない。

われわれが直接あるいは史料を通じて間接的に知ることのできる前近代社会はすべて個別具体的な社会である。それは常に、特定の時代、特定の地域に属し、特定の自然環境を背景に、特定の言語・宗教・伝統・慣習を共有する民族によって構成される。そのため、現実の前近代社会で個人が取り結ぶさまざまな社会関係の大部分は、その社会に固有な関係になる。しかしながら、若干の社会関係は、すべての前近代社会に、より正確には、およそ領主が影響力を行使するすべての社会に共通な関係である。この共通な社会関係を領主制の経済原理と呼べば、われわれがこれまで取り上げてきたのはまさしく領主制の経済原理である。

領主制の経済原理は、われわれの想像の産物では決してない。また、領主制の経済原理が多数の個別具体的な社会関係によって隠されているということさえ正確ではない。経済原理は、特定の時代・地域に固有な社会関係と並んで確かに個別具体的な歴史事実の中に実在する。ただ、ごく少数の単純な社会関係から構成される領主制の経済原理が、膨大な量の個別具体的な社会関係に取り囲まれているために、一見すると、前者があたかも後者によって隠されているかのような印象を持つだけなのである。われわれは、分析的思考によって、経済原理とそれを取り囲む個別具体的な社会関係を分離し、経済原理そのものを取り出すことができる。だが、こうして抽出された経済原理の現実妥当性を検証しようとするとき、もはや分析的思考は役に立たない。その検証のためには個別具体的な社会関係を背景に、実際に領主制の経済原理がどのような姿をとるのかを示す以外にない。領主制の理論の検証は、数々の具体的事例を取り上げながら、領主制の経済原理を例証する形で進められる。領主制の理論の検証に際してなによりも注意すべき点は、経済原理は間違いなく客観的実在であるにもかかわらず、経済原理そのものを純粋な形で史料の中に見出すことは決してないのだということである。

いうまでもなく、すべての実証研究は史料によって、特に文献史料によって制約される。いつ、どこで、誰が何をしたかを調べるような個別具体的な歴史研究では、特定の時代、特定の地域に関する有益な文献史料がどれだけ残されているかが、その成否を左右する。それに対し、領主制の理論に関する実証研究では、史料の制約は多少緩和される。領主制の理論は、領主制が

成立するすべての社会に共通な性質を論じており、われわれは、この理論の実証において、領主制が成立したすべての歴史社会の史料を利用できるからである。たとえ史料の制約のために1つの地域だけでは実証研究が行き詰まったとしても、この限界を別の地域の史料を利用して打開することも可能になる。時間的にも空間的にもできるだけ広い範囲を参照することが領主制の理論の実証にとって望ましいことが理解できるだろう。

6. 歴史的事例

本節では、農業生産の不確実性および領主の経済的機能の2点に限って、領主制の理論の検証を行う。とはいえ、一次史料に基づく本格的な実証研究を展開するつもりは全くない。われわれが参照するのはせいぜい経済史家の研究論文であり、多くは個別具体的な経済史研究に対する専門家の総括である。むしろ、ここでは個別具体的な経済史の専門家による本格的実証研究の展開を今後に期待しつつ、ただ領主制の経済原理が具体的事例の中にどのような形で見いだせるかを示すにとどめる。

(1) 中世ヨーロッパ

信頼できる史料が多少とも残されている9世紀から14世紀までの期間全体を通じて、西ヨーロッパの至る所で農業生産は著しく不安定であった。当時の主食はパンであり、耕地面積の相当部分が穀物生産に供せられ¹¹⁾、多大な労力が穀物生産に払われたにもかかわらず、穀物の収穫量は同じ年でも地域ごとの偏差が大きく、また同じ地域でも年ごとの変動が顕著で、穀物生産は決して一様でも安定的でもなかった¹²⁾。全国的には不作の年であっても、なかには豊かな収穫に恵まれた地域があり¹³⁾、全体として農業生産が芳しくなかった14世紀前半でさえ例外的な豊年も皆無ではなかった¹⁴⁾。たとえば、イングランドでは1315年と1316年の2年間、記録的な凶作が続いたが、翌年、生産量は平年並みに回復し、1318年にはすべての種類の穀物について非常に豊かな収穫がもたらされた¹⁵⁾。生産量の年ごとの激しい変動は穀物価格の動きにも反映された。収穫期直前に高騰し、収穫とともに下落するという年間

を通じての季節的な変動に加えて、各地の穀物価格は毎年毎年大きく揺れ動いた¹⁶⁾。さらに、穀物価格の地域間格差も無視できない。穀物市場は細分化されており、近隣の村落でも穀物価格はときとして3倍もの開きを生じた¹⁷⁾。もちろん、このような地域間の価格格差は、収穫量の違いだけが原因ではない。近接地域間であっても穀物の大量輸送が容易でないという当時の陸上輸送の制約も少なからず関連がある¹⁸⁾。

中世ヨーロッパにおいて、牧畜は穀物生産と並ぶ農業生産のもう一つの柱であり、農耕と牧畜は中世全期を通じて緊密な補完関係を保ってきた。牧畜についても事情はほとんど変わらなかった。天候不順が穀物生産に多大な損害を与えたように¹⁹⁾、家畜伝染病は牧畜に深刻な被害をもたらした。イングランドでは、ノルマン征服から13世紀末までの間、全国規模の家畜伝染病の流行が飢饉と同じくらいの頻度で発生し、地方規模の流行はさらにそれを上回って頻発した²⁰⁾。家畜伝染病が人々の生活に与えた影響は決して小さなものではない。羊毛生産は羊の伝染病によって大きな打撃を受け²¹⁾、牛の伝染病はさらに農業生産全体を脅かした。牛は、犁を牽引する役畜として近代以前の農耕の中で決定的な役割を果たしていたから、伝染病による役牛の激減は穀物生産の根幹を揺るがすことになった²²⁾。もともと労働生産性が低いうえに²³⁾、生産水準を一定に保つことが難しく、穀物の不作や家畜伝染病が頻発したため、人々は日常的に食糧不足に苦しみ、ときに激しい飢饉に襲われた²⁴⁾。飢饉は多くの場合、ペストや腸チフスなど各種伝染病の流行の温床となり、多くの人命を奪うに至った²⁵⁾。

食糧不足、さらには飢饉の可能性が差し迫ったものであれば、人々は可能な限り、その危険に備えようとするだろう。陸上交通手段が十分に発達していなかったことを考慮すれば、もっとも確実な対策は余剰食糧をそのまま貯蔵することであろうが、中世ヨーロッパにおいて将来の食糧危機に備えての食糧備蓄がはたしてなされたかどうか、史料などの制約から現在までのところ、詳しいことはよくわかっていない。イングランド南部の荘園史料によれば、例外的に豊作の年が続けば、領主は相当量の穀物を備蓄することもできたが、通常は、穀物の次年度への持ち越しは皆無だった²⁶⁾。とはいえ、修道院領や司教領に代表される大所領の領主が、各地に散在する支配下の個別所

領からいかにして安定的に食糧を調達するかに日々頭を悩ませていた事実を見れば²⁷⁾、機会さえあれば領主が穀物の貯蔵を計画しただろうと想像するのもまったく無理なことではない。実際のところ、領主は、将来の欠乏に備えて食糧備蓄の必要性を痛感しつつも、穀物の平均収穫量があまりにも低かったために、ごくまれにしか十分な余剰穀物を次年度に持ち越すことができなかったのではなかろうか。

農耕には、犁をはじめ各種の農具が使用されたが、農民はこれらの農具すべてを自給できたわけではない。農民の手に余る複雑で高価な農具の製作は、鉄鍛冶や大工など農村に居住する専門の手工業者に委ねられた²⁸⁾。また、それぞれの領主屋敷には小さな工房が設けられ、そこで働く手工業者は領主の要請に応えるとともに、いくらかの対価と引き換えに、近隣農民のために農具の製作や修繕を請け負った²⁹⁾。そのうえ、農民は、水車、パンやビール作りのかまど、ぶどうの搾り器などの領主直営地の設備を利用することもできた。水車のような大規模な施設の建設と維持には費用がかかるため、荘園領主の資力と権威が不可欠だった³⁰⁾。領主は、直営地周辺の農民にこれらの設備の利用を強制し、水車やかまどの利用者から、たとえば一定量の穀物を使用料として徴収した³¹⁾。結局、農民は、ある場合は農具などの工業製品の取得という直接的な形で、またある場合は大型工業設備の利用という間接的な形で工業生産の恩恵にあずかったが、いずれにせよ、領主権力が、直接的な生産工程は別にして、さまざまな状況で工業生産に関与していたことはまちがいない。

(2) 農地改革以前のラテンアメリカ

一般に、より新しい時代に書かれた歴史史料ほど散逸せずに現代まで残される可能性が高い。だから、新大陸の征服が進められた15世紀から各地で農地改革が実施された20世紀中葉までのラテンアメリカの農村研究では、中世ヨーロッパの場合と比べ、はるかに豊富な史料が利用可能であるにちがいない。領主制の理論の実証研究に際して、われわれがラテンアメリカや次項で検討するインドなど発展途上国の経済史に注目するのは、現存史料の豊富さから、理論の検証に欠かせない数多くの具体的事例をそこに期待できるから

である。とはいえ、発展途上国の経済史の活用にも問題点がないわけではない。いまだ地球上にいかなる近代社会も存在せず、それゆえ近代社会との接触などまったく考える必要がなかった中世ヨーロッパとは違い、発展途上国の経済史研究では、近代社会への途を歩むヨーロッパ列強の政治的経済的影響を無視できない。よく知られているように、スペイン人は新大陸征服の直後から金銀の採掘に強い関心を示し、ラテンアメリカ各地で鉱山開発に成功した。各地で採掘された貴金属の大部分は、メキシコ大西洋岸で船積みされ、植民地本国に送られた³²⁾。その一方で、新しく開発された鉱山では生産の増大とともに小麦やトウモロコシなどの食糧、製錬工程や輸送に不可欠な牛や羊、さらに織物など各種手工業製品に対する需要が急速に高まり、メキシコ北部やペルー高地では、これらの需要を満たすために、銀鉱山の周辺に多数のアシエンダ (hacienda) が形成された³³⁾。こうして、その内部構造において前近代的なアシエンダは、近代化への途を進む植民地本国に貴金属を供給する鉱山業の成長を契機に誕生し、銀生産の拡大とともに大きく発展する。もともと、その後、銀産出量が低下すると、鉱山地域での農産物需要はたちまち減退し、一部のアシエンダはそれによって自給自足的な性格を強めることになった³⁴⁾。アシエンダの形成と発展が、近代社会からの、より正確に言えば形成途上にある近代社会からの強い経済的影響にさらされていたとすれば、その強力な作用によって、基本的には前近代社会の生産組織であるアシエンダに近代社会の経済的特徴が刻印されるようなことはなかったのだろうか。その可能性を否定することは難しい。発展途上国の農村では、前近代的な生産組織であっても、近代社会からの強い影響を受けて、異質な要素が入り込み、その本来の姿が失われてしまう危険性は十分に考えられる。そのため、発展途上国の経済史研究の活用の際には、豊富な具体的事例の1つ1つについて注意深い観察によって前近代的な要素と近代的な要素を選り分ける作業、その作業が不可欠になる。発展途上国の農村は、前近代社会の経済理論に貴重な素材を提供する一方で、その素材の活用には、より一層の注意深さが要求される。

新大陸では、インディオの伝統農法に加え、スペイン人によってヨーロッパの農作物や農業技術が持ち込まれたが、いずれにせよ主として簡単な農具

と家畜の労役に頼る農業生産³⁵⁾は自然条件の急変に対して脆弱であった。ペルー高地では19世紀に入って、旱魃の年が続き、農作物や家畜に甚大な被害が生じ、凶作による食糧不足は、広い範囲で飢饉と伝染病の流行を引き起こした³⁶⁾。また、メキシコ北部では20世紀初頭、洪水・旱魃・霜害など数年にわたる自然災害によって農業生産の不振が続き、社会不安が助長された³⁷⁾。もちろん、事態がこれほど深刻になることは稀だったが、人々が天候不順による不作を絶えず気にかけていたことはまちがいない。実際、メキシコ中部では18世紀後半、春の降雨量不足や春秋の降霜がしばしば収穫量の低下を招き、旱魃や霜害は、農業生産に対する重大な脅威であり続けた³⁸⁾。また、一般に農作物の収穫量が安定せず、年ごとに揺れ動くのも³⁹⁾、農業生産が天候など自然条件に大きく左右されていたことの証拠である。では、このように農業生産が不安定であったのは、本稿が対象とする時期、ラテンアメリカの自然環境が特別に過酷であったからだろうか。必ずしもそうとはいえない。たとえば、灌漑設備が降雨量の不足を補い、霜害の防止に役立ったように⁴⁰⁾、農業技術の発達は大気不順が引き起こす悪影響を大幅に緩和することができた。だから、農業生産の脆弱性は農耕技術の未成熟や設備投資の不足にも一因があるといえる。ところが、前述したメキシコ中部の場合、灌漑設備の普及は、アシエンダ所有者やインディオの有力者が経営する大農園に限られていた⁴¹⁾。

気候条件の年々の変化は農産物価格の変動にも反映された。好天による豊作は農産物の市場供給を増やし、価格を最低限まで押し下げる一方、天候不順に伴う凶作は穀物をはじめ農産物の深刻な品不足を招くと同時に、農産物価格を急騰させた⁴²⁾。もっとも、農産物価格の変動の激しさは、農業生産の不安定性だけが原因ではない。ちょうど、ヌエバ・エスパーニャが18世紀、4つの互いに孤立した経済領域に分れ、領域相互間で主要食料品が実質的に取り引きされることがなかった⁴³⁾ように、陸上交通の未発達から穀物をはじめ主要食糧の全国市場の展開が遅れていたことも、その原因の1つであった⁴⁴⁾。さらに、一般にスペイン王権による交易の制限⁴⁵⁾や良質で安定的な鑄造貨幣の不足⁴⁶⁾が全国的市場の形成を妨げていたことも忘れてはならない。

農業生産が天候などに左右されやすく、毎年の収穫量が安定せず、ときとして飢饉をもたらす凶作が予想されるとき、人々は、予想される危機的事態

にどう対処するだろうか。農業危機の際でさえ、近隣地域からの食料調達が困難である点を考慮すれば、最も有効な対策は事前の食糧備蓄であると思われる。だが、現在までのところ、ラテンアメリカでこの時期、食糧の備蓄が行われたかどうか、また、行われたとして、どの程度の食糧備蓄が可能であったのか、詳しいことはわからない。ただ、わかっているのは、凶作で品不足になった市場に大量の穀物を放出して巨額の利得を上げるために大土地所有者の手でなにがしかの食糧備蓄がなされていたという事実だけである⁴⁷⁾。

手工業製品の供給に対するアシエンダ所有者の関与は、農産物供給への関与と比べれば多少ともはっきりしている。アシエンダで働く農民・牛飼い・羊飼いは、小麦粉・砂糖・塩・ラード・チーズ・バターなどの加工食品、酒類、衣類、ろうそく・石鹼・マッチなどの家庭用品、道具の供給を受けることができた⁴⁸⁾。アシエンダはこれらの手工業製品のうち少なくとも一部を自給する。たとえば、イエズス会所有のアシエンダでは、農民や奴隷に支給される衣料品が所領内の織物工房で生産された⁴⁹⁾。このとき、手工業製品供給へのアシエンダ所有者の関与は明白である。だが、これほど明白でなくても、前述の手工業製品の大部分は、アシエンダ所有者が経営する売店 (hacienda store) を通じて農民や牧人に手渡され⁵⁰⁾、アシエンダ所有者の関与は疑問の余地がない⁵¹⁾。また、大規模なアシエンダや砂糖プランテーションは、所領内に木工所、鍛冶工房を備え⁵²⁾、農業労働者や羊飼いと並んで、大工・鉄鍛冶などの専門職を抱えていた⁵³⁾。アシエンダ所有者たちは、所領内で使われる犁・シャベル・山刀などの農具や荷車⁵⁴⁾の組立や修繕をこれらの専門職に任せたのだろう。事実、メキシコ中部の糖業アシエンダでは、犁や荷車など必要な品々が所領内の手工業者によって組み立てられ、修理されていたことがわかっている⁵⁵⁾。彼らは領主直営地で使用される農具や用具の製作や修理を主な職務にしていたにちがいないが、その傍ら小作人や分益小作農の要望に応じることが全くなかったと言い切れるだろうか。最後に、アシエンダ所有者は、ダムを築き、運河や水路を整備し、小麦・綿花・サトウキビが栽培されている農地の灌漑に力を入れてきた⁵⁶⁾。このような灌漑設備は領主直営地だけを潤してきたのだろうか。灌漑設備は農民保有地にも若干の農業用水を供給し、農民も、アシエンダ所有者が建設したこのような工業施設の提供する便益の

一部を享受できたと思われる。

(3) 分離独立以前のインド

南アジアに関しては、二次文献の利用可能性を考慮して、主にイスラム王権の成立以後イギリスからの分離独立までのインド農村社会を取り上げる。この時期、農業生産はいまだ自然環境に多くを依存してきた。特に、適度な降雨が期待できるかどうかは農業生産にとって決定的に重要だった。豊富な水資源は耕地面積当たりの農産物収穫量を高めたから、年間を通じて降雨量に恵まれた地域では一般に農業生産性が高かった。農業が主要な生産活動の場であった時代に人口の集中が見られたのは多くの場合このような地域である⁵⁷⁾。また、降雨量は、地域ごとの作付け品種をも左右した。たとえば、南インドでは降雨量の多い地域では水稻が、降雨量が少ない地域ではキビが栽培された⁵⁸⁾。農業生産が天候など自然的諸条件に強く依存しているとき、自然的諸条件の変化はたとえ微少なものであっても農産物の収穫量に深刻な影響を及ぼす。作物の生育に必要な雨量をモンスーンや秋雨によって確保している地域では、モンスーンの到来が2、3週間遅れても収穫量の低下が生じ、秋の降雨量が十分でなければ、広い範囲で飢饉が発生することもあった⁵⁹⁾。一方、地域によっては、降雨が季節はずれだったり、限度を超えていたために、秋に収穫するはずの作物の成長が遅れ、そのことが飢饉の原因になる場合もあった⁶⁰⁾。単位面積当たりの収穫量は気象条件に応じて年ごとに大きく揺れ動いた⁶¹⁾。収穫の不確実性はさらに、農産物価格の激しい変動として現れる。大河の流域を除いて一般に内陸部では穀物の大量輸送が困難だったという事情も加わって、各地の農産物価格は豊作時に急落し、不作による欠乏時に急上昇した⁶²⁾。その結果、農産物価格の年々の変動は、農産物を除く財の価格変動と比べてずっと大きくなった⁶³⁾。

粗放的な農耕では、天候不順による農業生産の不振は、すでに見たようにしばしば深刻な食糧不足を引き起こした。実際、インドでは、イギリス支配の始まる18世紀後半から独立を達成する20世紀中頃までの約200年間、十数回にも及ぶ大規模な飢饉とさらにそれを上回る局地的な飢饉や食糧危機が発生した⁶⁴⁾。もちろん、このような飢饉の頻発は単に自然環境の変化だけが原因で

はない。植民地支配による政治経済的諸条件の変化もその一因であることも忘れてはならない⁶⁵⁾。

農業生産が著しい不確実性を伴い、凶作が食糧危機に結びつく可能性さえ決して小さくないとき、人々はこの不確実性にどう対処するだろうか。農業生産の不確実性そのものを軽減する生産技術の飛躍的な向上が見込めず、さらに、食糧危機に際して近隣地域からの食糧の大量買い付けもままならないとすれば⁶⁶⁾、残された可能性は事前の食糧備蓄以外にない。では、穀物をはじめ食糧をあらかじめ備蓄し、事実上、予想される食糧危機に備えることができたのは誰であろうか。間違いなく大多数の農民にはそんな余裕はなかった。貧しい農民は、多くの地方で一式の犁を手に入れるだけの貯えもなく、場所によっては1年の大半を、自らが刈り入れた穀物の代わりに果物や野菜・牛乳などで過ごさなければならなかった⁶⁷⁾。領主についてはどうだろう。残念ながら、われわれは、若干の断片的な事実から領主層が穀物の備蓄に関与していた可能性を推察できる程度である。ムガル王権は、食糧危機に際して何度か穀倉を開き、困窮した民衆に穀物を配給した⁶⁸⁾。この事実は、ムガル王権の手でいくらかの穀物備蓄がなされた可能性を示唆する。さらに、カシミールでは、穀物業者が収穫時に国やジャギールダール(jagirdar)から穀物を大量に買い入れ、欠乏時、それを国に高値で売り払った。ムガル朝の政府高官自らがこのような穀物投機に関わることがあったという事実⁶⁹⁾やこの時期広範な領主階層が商業活動にも積極的に乗り出していた⁷⁰⁾点に注意すれば、少なくとも一部領主層によってその主観的意図はともかく事実上飢饉に備えて穀物が貯蔵されることになったと推量することはまったく無理なことではない。

本稿が特に関心に寄せる時期、インドの伝統的工業生産は、村落で、都市であるいは領主屋敷で働く多数の手工業者の手に委ねられた⁷¹⁾。1つの村落内部あるいは近接するいくつかの村落の間では、ジャジマーニー制度(jajmani system)や「村抱え」の制度を通じて、村落に居住する手工業者によって生産された手工業製品が、農作物の提供をはじめとする各種の便宜と引き換えに農民に手渡された⁷²⁾。ジャジマーニー制度がなによりも異なったカースト⁷³⁾に属する家族間の財とサービスの相互供給であり、しかも、祭司・床

屋・占星術師など宗教儀式で重要な役割を果たすカーストがその中に含まれていたように⁷⁴⁾、また、「村抱え」の制度においては村の祭礼に際して寺院に供えられた供物の一部が手工業者に与えられたように⁷⁵⁾、この手工業製品と農産物の交換は強い宗教的色彩を帯び、もっぱら伝統によって支えられてきたように見える。しかしながら、これらの制度は、宗教や伝統の力だけで維持されてきたのではない。制度内に生じる利害対立や紛争の解決は権力の介入を必要とする。各カースト内部の内紛については長老会議やカースト集会が、カースト間の利害対立については支配的カーストの代表者からなる村民集会 (panchayat) がそれぞれ裁定を下し、慣習法に基づいて平和と秩序が保たれた⁷⁶⁾。これらの組織のうち、特に村民集会は、領主階層の最下層に位置する村長や村書記など村の世襲役人を中心に運営され、特に村長によって主宰された⁷⁷⁾。この事実は、村落内の農産物と手工業品の交換に領主が深く関与していたことを示唆するものである。

貯水池や堰堤など灌漑設備の建設も広い意味での工業生産であり、農民は、農業用水の確保や自然災害の防止という形でこの「工業製品」の恩恵を受けることができた⁷⁸⁾。これらの灌漑設備の半数以上は、井戸や貯水池など小規模なものであったが、なかには水路や運河など大規模な設備も作られた⁷⁹⁾。このうちある程度以上の規模の灌漑設備になると、その建設や補修には、ザミンダール (zamindar) など領主層や国家の資力と権威が不可欠になる⁸⁰⁾。その証拠に、地代の大幅な減免に伴う領主層の意欲喪失やムガル王権の崩壊は、一部の灌漑設備の荒廃を招くに至った⁸¹⁾。

7. 結 論

農民・手工業者・領主は、不確実性の大きい農業生産と熟練を要する工業生産から構成される農工分業体制の中でそれぞれ一定の機能を果たす。特に、領主は、農民と手工業者の間の直接交換に介入し、飢餓に備えて農産物を備蓄すると同時に、農民への工業製品の円滑な供給に注意を払う。本稿は、この領主の機能が農工分業体制を維持する上で必要不可欠であり、領主はその機能の担い手として農工分業体制の中に確固たる存在理由を持つことを示し

た。領主が農民の剰余生産物の少なくとも一部を受け取るのは、領主が農工分業体制の維持に欠かせない一定の機能を果たしているからである。

われわれは一連の研究の中で、領主制における経済主体の存在条件を探究してきた。その研究成果は領主制の経済理論、すなわち領主制下の各経済主体の行動とその相互作用に関する理論に確かな基礎を与えるものである。なぜなら、特定の社会に属する経済主体のいかなる経済行動もその経済主体の存在を前提しているからである。

補 論

いま、社会が農民 m 人、手工業者 n 人だけから構成されているものとする。単純化のために農民の年間の農耕労働時間を 1 に基準化しよう。農民は、農具類など工業製品 D 単位を利用し、1 時間の農作業によって、1 年間に生産量 X の農作物を収穫する⁸²⁾。ただし、農業生産は不確実性が高く、平均収穫量 X^e がいつも得られる保証はない。一方、手工業者は、工業製品 uD 単位を利用し、 u 時間 ($0 < u < 1$) の農作業によって、1 年間に生産量 uX の農作物を収穫するとともに、 $1-u$ 時間の工業労働によって生産量 Y の工業製品を産み出す。工業生産は、自然条件への依存の程度が農業生産に比べて著しく低く、生産量の分散は小さい。農業生産と異なり、工業製品の生産量を確率変数にしていないのは、そのためである。また、工業生産において原材料投入を考慮していないことは、厳密には広い意味での農産物の加工という工業生産の定義に反するが、本稿ではとりあえず議論を単純にすることを優先する。

農民であるか手工業者であるかを問わず、各人は生命維持のために 1 年間に一定量 C 以上の食糧消費を必要とすると仮定すれば、社会全体での食糧の必要消費量は、

$$mC + nC$$

となる。社会全体での農産物の年収穫量 $mX + nuX$ がこの必要消費量を超過しなければ社会は存続できないから、農工分業体制に基づくこの社会の存続条件の 1 つは、

$$mX + nuX \geq mC + nC$$

である。この式は、

$$m(X - C) \geq n(C - uX)$$

と変形できる。左辺は農民の剰余生産物を、右辺は手工業者の食糧不足分を表しているから、農工分業体制存続の第1条件は、農民の剰余生産物が手工業者の食糧不足分より多いことであると言い換えることもできる。実際、手工業者の食糧不足分は農民の剰余生産物の中から補充される。

食糧が備蓄できるとき、前述の存続条件はやや緩和されて、

$$mX^e + nuX^e \geq mC + nC$$

となる⁸³⁾。もし十分な食糧備蓄がなされるとすれば、もはや毎年の収穫量はその年の必要消費量を上回るかどうかを心配する必要はなくなる。さらに単純化のために、人々が常に生存水準に等しい消費水準に甘んじると仮定しよう。上の式は、

$$mX^e + nuX^e = mC + nC \quad [1]$$

となる。われわれは今後、この存続条件が成立していることを前提に議論を進めるが、この条件があくまで農工分業体制存続の必要条件にすぎないことは注意を要する。この条件が満たされても、毎年の食糧備蓄が不十分であれば、やはり飢餓の発生は避けられない。

農産物と工業製品の交換が農民と手工業者の自由な取引に委ねられたとき、食糧は必要なだけ備蓄されるだろうか。豊作の年、すなわち必要消費量以上の収穫が得られた年、農民は農産物と工業製品の間の消費選択に直面する。農民は食糧消費を、必要消費量 C を上回る水準 C' に高めると同時に農民全体で剰余生産物 $S_x \cdot n$ を手工業者に引き渡す。もちろん、

$$nS_x = m(X - C')$$

が成立する。このとき、 $C' > C$ であることに注意すれば、

$$nS_x < m(X - C) \quad [2]$$

であることもすぐわかる。食糧消費量 C' の決定は農民の消費選択の結果であるから、食糧消費量 C' を収穫量 X の関数とすることは決して不自然ではない⁸⁴⁾。食糧消費量 C' が収穫量 X の関数であれば、収穫量は確率変数だから、各手工業者への農産物供給量 S_x も確率変数になる。そこで、[2] の両

辺の平均値をとると、

$$nE(S_x) < m(X^e - C)$$

が得られる⁸⁵⁾が、さらに [1] を考慮すれば、

$$E(S_x) < C - uX^e$$

と書き換えることができる。左辺は手工業者1人あたりに支給される食糧の平均値を、右辺は食糧不足分の平均値を表しているから、この不等式は、平均的に見れば手工業者の食糧不足分が農民からの食糧供給だけでは充足されないことを示している。

農工分業体制存続の第2条件は、農民が、農作業の過程で消耗した工業製品を毎年補充できることである。ところで、手工業者は、自分自身の農耕に必要な工業製品 uD を控除した上でその残り $Y - uD$ を農民に供給できる。とはいえ、自由な手工業者が工業製品を進んで供給するのは、工業製品と交換に、不足する食糧を手に入れる限りである。交換によっても農作物の自給分 uX と合わせて必要消費量 C を確保できないとすれば、手工業者は決してこの交換に参加しようとしないうだろう。そのため、手工業者の交換過程への自発的参加を前提とする限り、工業製品に対する農産物の交換比率 p には、ある最低値が存在する。具体的には交換比率 p が一定値、

$$\frac{C - uX}{Y - uD}$$

を下回れば、手工業者はこの交換によって必要消費量を確保できず、取引は成立しない。農業生産の不振により農民が農作物を提供する余裕がなく、農産物と工業製品の交換比率がこの一定値より低ければ、農民は手工業者から必要な工業製品を入手できない。

結局、農民と手工業者による農産物と工業製品の直接交換では農工分業体制は維持されない。では、領主がこの直接交換に介入すれば、農工分業体制の存続の可能性は高まるだろうか。この点を検討するためにまず、平均的な意味で食糧供給が維持される条件である [1] を、領主の存在を考慮して修正しなければならない。いま、 m' 人の農民と n 人の手工業者に加えて l 人の領主から構成される社会を想定しよう。領主は農業生産はもちろん工業生産にも直接関与しないが、食糧なしには生きられないことは他の経済主体と同

様である。いま単純化のために領主も生存水準に等しい消費生活に甘んじているものとする⁸⁶⁾。この社会での最低必要消費量の総計は、

$$m'C + nC + lC$$

となる。最低必要消費量に等しい農作物が農民と手工業者によって生産されることが、領主を含む社会の全構成員の生存が保証される条件である。したがって、平均的に見て食糧供給が維持され、人々の生存が保証されるためには、

$$m'X^e + nuX^e = m'C + nC + lC \quad [1']$$

が成立しなければならない。[1] と [1'] を比較し、 $X^e > C$ に注意すれば、

$$m' > m$$

を得る。領主の必要消費量が増加したために、農民全体が提供すべき剰余農産物は増加し、その増加分は以前より多くの農民の労働によって支えられていることがわかる。

領主が農民から農作物を徴収し、食糧備蓄に努めれば、凶作の影響は相当程度緩和できる。このことを簡単な例を使って示そう。いま、収穫は豊作 X_1 と凶作 X_2 の2通りしかなく、豊作となる確率を q_1 、凶作となる確率を q_2 とする。いうまでもなく、

$$q_1 + q_2 = 1$$

である。豊作時の食糧備蓄量 Z_1 は、農民全体から徴収された農産物 $m'(X_1 - C)$ の中から、手工業者への支給分 $n(C - uX_1)$ および領主自身の消費量 lC を差し引いた残りであるから、

$$Z_1 = m'(X_1 - C) - n(C - uX_1) - lC$$

である。一方、凶作時の食糧給付量 Z_2 は農民と手工業者の双方の食糧不足分に領主自身の消費量 lC を加えたもの⁸⁷⁾だから、

$$Z_2 = m'(C - X_2) + n(C - uX_2) + lC$$

と書ける。このとき、

$$X^e = q_1X_1 + q_2X_2$$

に注意すれば、[1'] が成立する限り、

$$q_1Z_1 = q_2Z_2$$

であることがわかる。すなわち、豊作時の食糧備蓄量の期待値は凶作時の食

糧給付量の期待値に一致する。

注

- *) 本稿の執筆に際して森本芳樹教授(久留米大学)から貴重な御教示を頂いた。記して感謝申し上げます。なおありうべき誤りはすべて筆者の責任である。
- 1) さらに進んで、適当な条件さえそろえば、これら3つの地域以外でも、ここで述べた基本的経済構造が成立していると考えことはまったく不自然なことではない。
 - 2) もちろん近代以前のすべての社会に領主制が見られるわけではない。しかし、領主制が成立していない前近代社会は本稿の対象外である。
 - 3) 関根 [1997], 関根 [1998], 関根 [1999].
 - 4) 本節以降の議論の厳密な展開については補論を参照のこと。
 - 5) このことは、農民あるいは手工業者内部の階層格差を捨象することを意味する。
 - 6) 厳密に言えば、農産物および熟練を要さない工業製品と高度な技能によって製作される高価な衣類や工芸品・調度品との選択である。
 - 7) もちろん、農民が将来の食糧供給を約束することで、手工業者から工業製品を入手する可能性は排除できないが、その約束を履行できる保証はない。特に農業生産の不確実性が高いことを考慮すれば、将来の食糧供給の約束は非常に疑わしく、手工業者がこのような信用取引に応じるとは考えにくい。
 - 8) さらに、工業製品の生産が中断すれば、その生産を支えてきた熟練の維持や継承も難しくなる。
 - 9) 厳密にはこの命題は証明を要するが、本稿ではそこまで立ち入らない。
 - 10) もちろん、領主の介入によって実際に食糧不足や飢饉が完全に回避されるわけではない。それは、領主が自分自身の職務に忠実でなかったからかもしれないし、穀物の大量備蓄が技術的に著しく困難であったからかもしれない。
 - 11) Bloch [1968], pp.21-22, Duby [1977a], pp.68-70.
 - 12) Duby [1977a], p.92, pp.192-193.
 - 13) Kershaw [1973], pp.17-19.
 - 14) Carpentier [1962], p.1075.
 - 15) Kershaw [1973], p.19.
 - 16) Duby [1977b], p.189, Bailey [1998], p.235.
 - 17) Duby [1977a], p.240, Duby [1977b], p.189.
 - 18) Pirenne [1969], pp.32-33, Bailey [1998], p.236.
 - 19) たとえば、1315年、夏の間降り続いた長雨のせいで、その年のイングランドの収穫は悲惨なものとなった。(Kershaw [1973], p.7).
 - 20) Kershaw [1973], p.26.

- 21) Kershaw [1973], p.22.
- 22) Kershaw [1973], p.24.
- 23) Duby [1977a], p.91, p.193.
- 24) Duby [1977a], p.193, Carpentier [1962], pp.1075-1076.
- 25) Carpentier [1962], p.1081, Kershaw [1973], p.11.
- 26) McClosky and Nash [1984], pp.174-175.
- 27) Duby [1977b], pp.21-23, 森本 [1995], pp.146-147.
- 28) Duby [1977a], p.81, Miller and Hatcher [1995], pp.130-131, p.133.
- 29) Duby [1977a], p.84, p.203.
- 30) Miller and Hatcher [1995], p.7, pp.77-78.
- 31) Bloch [1968], p.83, Pirenne [1969], p.58, Duby [1977b], p.85, Duby [1977a], p.79.
- 32) Furtado [1970], p.13, TePaske and Klein [1981], p.123.
- 33) Furtado [1970], p.13, Florescano [1984], p.171, Mörner [1984], p.192.
- 34) Chevalier [1963], p.180.
- 35) Florescano [1984], pp.153-154, Mörner [1984], p.205, p.207, Long and Roberts [1994], p.343.
- 36) Tandeter [1991], pp.40-41, pp.43-44, pp.47-48.
- 37) Walker [1992], p.249, p.246.
- 38) Ouweneel [1989], p.404.
- 39) Chevalier [1963], p.62, Florescano [1984], p.172.
- 40) Barrett [1970], p.41, p.44.
- 41) Ouweneel [1989], p.404.
- 42) Florescano [1984], pp.172-174, Chevalier [1963], p.62, Mörner [1984], p.211.
- 43) Ouweneel [1989], p.402.
- 44) Ouweneel [1989], p.402, Chevalier [1963], pp.291-292.
- 45) Florescano [1984], p.184.
- 46) Macleod [1984], p.264.
- 47) Florescano [1984], p.173, Macleod [1984], pp.252-253.
- 48) Cross [1970], p.10, p.12, Walker [1992], p.244, Bauer [1983], p.102.
- 49) Bauer [1983], p.100, Berthe [1966], pp.101-102.
- 50) Walker [1992], p.244, Cross [1978], p.10, p.12, Florescano [1984], p.179, Barrett [1970], pp.23-24.
- 51) アシエンダ売店で販売された手工業製品には、都市手工業者によって製造されたものが含まれていたにちがいないが、仮にそれが確認できても、そのことからただちにこれらの製品がアシエンダ経営の外部から持ち込まれたと断定してはならない。よく指摘されるように、アシエンダ所有者は都市に居を構え、都市内に手工業施設

を保有していた。そこで、アシエンダ所有者と都市手工業との関係が明らかにならないうちは、この点に関する断定は避けたほうが賢明であろう。

- 52) Chevalier [1963], p.289, p.75, Barrett [1970], p.52.
- 53) Walker [1992], p.244, Florescano [1984], p.177, Berthe [1966], p.97, p.100, Barrett [1970], p.19.
- 54) Barrett [1970], p.44, Berthe [1966], p.95.
- 55) Barrett [1970], p.65, p.77, p.44.
- 56) Walker [1992], p.242, Barrett [1970], pp.41-42.
- 57) Habib [1982a], p.6, p.1.
- 58) Stein [1982a], pp.25-26.
- 59) Mishra [1994], p.93, p.100.
- 60) Kaw [1996], p.61.
- 61) McAlpin [1983], p.880.
- 62) McAlpin [1983], pp.884-885, Rothermund [1988], p.4.
- 63) McAlpin [1983], p.891.
- 64) Mishra [1994], pp.96-106.
- 65) Mishra [1994], pp.91-96.
- 66) Kaw [1996], pp.63-64.
- 67) Raychaudhuri [1983], p.17, Kaw [1996], p.68.
- 68) Kaw [1996], p.63.
- 69) Kaw [1996], p.67.
- 70) Raychaudhuri [1982a], p.182.
- 71) Mishra [1994], p.30, p.33, Metcalf [1967], p.104.
- 72) ジャジマーニー制度については、Raychaudhuri [1982b], pp.279-280, Adams and Woltemade [1970], pp.51-52. 「村抱え」の制度については、Fukazawa [1982b], pp.308-309. なお、以下、ジャジマーニー制度については、分離独立以後に実施された現地調査にも言及する。
- 73) 正確にはジャーティ (jati) と呼ぶべきである。
- 74) Adams and Woltemade [1970], p.51, Gould [1964], p.16, pp.21-22.
- 75) Fukazawa [1982b], p.309.
- 76) Adams and Woltemade [1970], pp.50-51, Fukazawa [1982a], p.253.
- 77) Fukazawa [1983], p.178, Fukazawa [1982a], pp.252-253, Kulkarni [1967], p.42.
- 78) Mishra [1994], p.73, p.75, Stein [1982b], p.208.
- 79) Mishra [1994], p.84, Habib [1982b], pp.48-49, Habib [1982c], pp.214-217.
- 80) Chaudhuri [1983], pp.124-125, Habib [1982b], p.49, Alaev [1982], p.227.
- 81) Chaudhuri [1983], pp.130-131, Mishra [1994], pp.92-93.

- 82) 毎年の農産物の収穫量 X は確率変数である。
- 83) 農産物は費用をかけることなく永続的に備蓄可能であると仮定した。
- 84) もちろん、通常のマクロ経済学的手法を使ってこのことを示すこともできるが、議論が必要以上に煩雑になるので本稿はそこまで深入りしない。
- 85) 確率変数 X の平均値を $E(X)$ で表す。
- 86) この想定が現実的でないことは明らかであるが、領主1人は他の経済主体の数人分の食糧を消費するという形で修正を行えば、以下の議論はそのまま妥当する。
- 87) 領主の食糧消費は自分自身への食糧給付とみなす。

参考文献

中世ヨーロッパ

- Bailey, M. [1998], 'Peasant Welfare in England, 1290-1348', *Economic History Review*, Vol.51, No.2, pp.223-251.
- Bloch, M. [1968], *Les Caractères Originaux de l'Histoire Rurale Française*, Tome Premier, Nouvelle Édition, (Paris: Armand Colin).
- Carpentier, E. [1962], 'Autour de la Peste Noire: Famines et Épidémies dans l'Histoire du XIV^e Siècle', *Annales E.S.C.*, Vol.17, pp.1062-1092.
- Duby, G. [1977a], *L'Économie Rurale et la Vie des Campagnes dans l'Occident Médiéval*, I, (Paris: Flammarison).
- Duby, G. [1977b], *L'Économie Rurale et la Vie des Campagnes dans l'Occident Médiéval*, II, (Paris: Flammarison).
- Kershaw, I. [1973], 'The Great Famine and Agrarian Crisis in England, 1315-1322', *Past and Present*, No.59, pp.3-50.
- McCloskey, D.N. and J. Nash [1984], 'Corn at Interest: The Extent and Cost of Grain Storage in Medieval England', *American Economic Review*, Vol.74, No.1, pp.174-187.
- Miller, E. and J. Hatcher [1995], *Medieval England: Towns, Commerce and Crafts, 1086-1348*, (London: Longman).
- 森本芳樹 [1995], 「所領における生産・流通・支配」, 佐藤彰一, 早川良弥編著, 『西欧中世史 (上): 継承と創造』, ミネルヴァ書房.
- Pirenne, H. [1969], *Histoire Économique et Sociale du Moyen Age*, (Paris: Presses Universitaires de France).
- 関根順一 [1997], 「領主制における生産技術と経済循環」, 九州産業大学『エコノミクス』第2巻第1号, pp.91-113.

ラテンアメリカ

- Barrett, W. [1970], *Sugar Hacienda of the Marqueses del Valle*, (Minneapolis: University of Minnesota Press).
- Bauer, A.J. [1983], 'Jesuit Enterprise in Colonial Latin America: A Review Essay', *Agricultural History*, Vol.57, No.1, pp.90-104.
- Berthe, J.-P. [1966], 'Xochimancas: Les Travaux et les Jours dans une Hacienda Sucrière de Nouvelle-Espagne au XVII^e Siècle', *Jahrbuch für Geschichte von Staat, Wirtschaft und Gesellschaft Lateinamerikas*, Vol.3, pp.88-117.
- Bethell, L. [1984] (ed.), *The Cambridge History of Latin America, Vol.2: Colonial Latin America*, (Cambridge: Cambridge University Press).
- Bethell, L. [1994] (ed.), *The Cambridge History of Latin America, Vol.6: 1930 to the Present*, (Cambridge: Cambridge University Press).
- Chevalier, F. [1963], *Land and Society in Colonial Mexico: The Great Hacienda*, trans. by A. Eustis, (California: University of California Press).
- Cross, H.E. [1978], 'Living Standards in Rural Nineteen-Century Mexico: Zacatecas 1820-80', *Journal of Latin American Studies*, Vol.10, No.1, pp.1-19.
- Florescano, E. [1984], 'The Formation and Economic Structure of the Hacienda in New Spain', trans. by R. Boulind, in Bethell, L. [1984].
- Furtado, C. [1970], *Economic Development of Latin America: A Survey from Colonial Times to the Cuban Revolution*, trans. by S. Macedo, (Cambridge: Cambridge University Press).
- Long, N. and B. Roberts [1994], 'The Agrarian Structures of Latin America: 1930-1990', in Bethell, L. [1994].
- Macleod, M. J. [1984], 'Aspects of the Internal Economy of Colonial Spanish America: Labour; Taxation; Distribution and Exchange', in Bethell, L. [1984].
- Mörner, M. [1984], 'The Rural Economy and Society of Colonial Spanish South America', in Bethell, L. [1984].
- Ouweneel, A. [1989], 'The Agrarian Cycle as a Catalyst of Economic Development in Eighteenth-Century Central-Mexico: The Arable Estate, Indian Villages and Proto-industrialization in the Central Highland Valleys', *Ibero-Amerikanische Archiv*, Vol.15, No.3, pp.399-417.
- 関根順一 [1998], 「大土地所有制の内部構造：ラテンアメリカの事例研究」, 九州産業大学『エコノミクス』第3巻第2号, pp.27-50.
- Tandeter, E. [1991], 'Crisis in Upper Peru, 1800-1805', *Hispanic American Historical Review*, Vol.71, No.1, pp.35-71.
- TePaske, J.J. and H.S. Klein, [1981], 'The Seventeenth-Century Crisis in New

- Spain: Myth or Reality?', *Past and Present*, No.90, pp.116-135.
- Walker, D.W. [1992], 'Homegrown Revolution: The Hacienda Santa Catalina del Alamo y Anexas and Agrarian Protest in Eastern Durango, Mexico, 1897-1913', *Hispanic American Historical Review*, Vol.72, No.2, pp.239-273.
- インド
- Adams, J. and U.J. Woltemade [1970], 'Village Economy in Traditional India: A Simplified Model', *Human Organization*, Vol.29, No.1, pp.49-56.
- Alaev, L.B. [1982], 'The Systems of Agricultural Production: South India', in Raychaudhuri, T. and I. Habib [1982].
- Chaudhuri, B. [1983], 'Agrarian Relations: Eastern India', in Kumar, D. and M. Desai [1983].
- Fukazawa, H. [1982a], 'Agrarian Relations and Land Revenue: The Medieval Deccan and Maharashtra', in Raychaudhuri, T. and I. Habib [1982].
- Fukazawa, H. [1982b], 'Non-Agricultural Production: Maharashtra and the Deccan', in Raychaudhuri, T. and I. Habib [1982].
- Fukazawa, H. [1983], 'Agrarian Relations: Western India', in Kumar, D. and M. Desai [1983].
- Gould, H.A. [1964], 'A Jajmani System of North India: Its Structure, Magnitude, and Meaning', *Ethnology*, Vol.3, pp.12-41.
- Habib, I. [1982a], 'The Geographical Background', in Raychaudhuri, T. and I. Habib [1982].
- Habib, I. [1982b], 'Northern India Under the Sultanate: Agrarian Economy', in Raychaudhuri, T. and I. Habib [1982].
- Habib, I. [1982c], 'The Systems of Agricultural Production: Mughal India', in Raychaudhuri, T. and I. Habib [1982].
- Kaw, M.A. [1996], 'Famines in Kashmir, 1586-1819: The Policy of the Mughal and Afghan Rulers', *The Indian Economic and Social History Review*, Vol.33, No.1, pp.59-71.
- Kulkarni, A.R. [1967], 'Village Life in the Deccan in The 17th Century', *The Indian Economic and Social History Review*, Vol.4, No.1, pp.38-52.
- Kumar, D. and M. Desai [1983] (ed.), *The Cambridge Economic History of India*, Vol.2: c.1757-c.1970, (Cambridge: Cambridge University Press).
- McAlpin, M. [1983], 'Price Movements and Fluctuations in Economic Activity (1860-1947)', in Kumar, D. and M. Desai [1983].
- Metcalf, T.R. [1967], 'Estate Management and Estate Records in Oudh', *The Indian Economic and Social History Review*, Vol.4, No.2, pp.99-108.

- Mishra, G. [1994], *An Economic History of Modern India*, (Delhi: Pragati Publications).
- Raychaudhuri, T. [1982a], 'The State and the Economy: The Mughal Empire', in Raychaudhuri, T. and I. Habib [1982].
- Raychaudhuri, T. [1982b], 'Non-Agricultural Production: Mughal India', in Raychaudhuri, T. and I. Habib [1982].
- Raychaudhuri, T. [1983], 'The Mid-eighteenth-century Background', in Kumar, D. and M. Desai [1983].
- Raychaudhuri, T. and I. Habib [1982] (ed.), *The Cambridge Economic History of India*, Vol.1: c.1200-c.1750, (Cambridge: Cambridge University Press).
- Rothermund, D. [1988], *An Economic History of India: From Pre-Colonial Times to 1986*, (London: Croom Helm).
- 関根順一 [1999], 「領主制の経済構造：インドの事例研究」, 九州産業大学『エコノミクス』第4巻第2号, pp.1-23.
- Stein, B. [1982a], 'South India: Some General Considerations of the Region and its Early History', in Raychaudhuri, T. and I. Habib [1982].
- Stein, B. [1982b], 'The State and the Economy: The South', in Raychaudhuri, T. and I. Habib [1982].